Twinkle 東京女子医科大学学術リポジトリ
Tokyo Women's Medical University - Information & Knowledge Database
https://twinkle.repo.nii.ac.jp

テュートリアル課題 熱とあざと石と

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-06-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 東京女子医科大学 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.20780/00033209

2018年度　　Segment.7

課　題　　No.1

課題名：熱とあざと石と

課題作成者：血液内科学　　風間啓至
感染症科　　井口成一

東京女子医科大学
医学部学務課

無断で複写・複製・転載すると著作権侵害となることがありますのでご注意下さい。

課題シート

2018-S7-T1-1
熱とあざと石と

シート1

45歳のAさんは会社員です。妻と5歳の子供一人の3人家族です。これまで大きな病気をしたことはありません。
最近少し仕事の疲れがたまっているようで、なんとなくだるさを感じます。だるさ以外にはこれといった自覚症状はありませんが、風邪かなと思い熱を測ってみると37.5度でした。すぐに治るだろうと思っていましたが、10日ほど続いたので一応会社の診療所に行きました。診察を受けると、特にぶつけた覚えもないのに腕にあざができていることを指摘されました。採血をしてもらいましたが、次の日にすぐ近くの大学病院を受診するように連絡がありました。

課題シート

2018-S7-T1-1
熱とあざと石と

シート2

Aさんが紹介されたのは、血液内科というところでした。血液検査で血球減少症があるといわれました。担当の先生は、「汎血球減少という状態です。すぐに入院して調べましょう」といいました。Aさんは「すぐ入院？」「いったいどんなことをするのかな」と思いました。

課題シート

2018-S7-T1-1
熱とあざと石と

シート3

Aさんは、入院するとエックス線検査などのほかに、説明を受けた後すぐに検査を受けることになりました。

課題シート

2018-S7-T1-1
熱とあざと石と

シート4

入院後、担当医から告げられた病名は、急性骨髄性白血病で、その中の急性前骨髄球性白血病という説明でした。これといった自覚症状がなかっただけにAさんにとって思いもよらぬものでした。直ちに治療を始めなければいけないということでした。担当医は病名や治療法を紙に書きながら説明をしていきます。
「映画みたいに骨髄移植とか受けないといけないのかな？」「治るかな」「子供も小さいからこれからのことが心配だな」、などいろいろなことが頭をよぎりました。

課題シート

2018-S7-T1-1
熱とあざと石と

シート5

治療により完全寛解となったAさんは、引き続き地固め療法という治療を受けることになりました。
治療開始から10日目の夜、Aさんは寒さと震えを感じ、39度の熱が出ました。何だか気分が悪く、意識はもうろうとしています。当直医が採血や処置をしています。
左腰背部になんとなく重たいような違和感があり、診察をすると左腰背部に叩打痛を認めました。
血液培養を採取した後、すぐに抗菌薬の点滴も始まりました。
3日後、血液から緑膿菌という細菌が検出されたようです。

シート6

Aさんの血液培養より検出された緑膿菌は最初から投与していた第４世代セフェム系抗菌薬であるセフェピムに良好な感受性を示していました。
また、Aさんの左尿管結石は自然に排石され、水腎症も改善していました。
腎周囲膿瘍や化膿性脊椎炎などの菌血症の合併症を認めませんでした。

造血も回復（白血球数5500/μL（好中球　88%））し、計２週間のセフェピムの点滴治療を終了しました。

Aさんは、その後の化学療法は全て順調に進み、現在は社会復帰し元の職場で元気に働いています。定期的な外来通院を行い、経過をみながらですが、仕事にも復帰する予定です。